

～人やものが行き交い発展した道～

甲州街道は江戸幕府によって整備された五街道の一つ。江戸日本橋から中山道の下諏訪宿までを結ぶ53里2町余り(約205キロメートル)の街道です。

この間に45の宿場が置かれ、そのうち甲斐国には25の宿場があり、参勤交代では主にかたしまたかますわ高遠藩内藤家、飯田藩堀家の3藩が甲州街道を利用しました。甲斐国が幕府直轄地となってからは甲府城の警衛にあたる武士らも往来するようになります。

当初は、万一に備える重要な軍用路として整備された道でした。そのため、宿場町の出入り口付近や甲府城東側には、二手に分かれる道やほぼ直角に曲がる道があります。これらは宿場町や城下町に入るに当たって、相手を錯乱させたり、見通しを悪くして敵の攻撃を防御する役割があったといわれています。

江戸時代の中・後期になると、天下泰平の時代と共に旅人や文化人が行き交ったほか、甲州・信州から江戸へ農産物を運ぶ流通の道としての役割も重要になりました。甲州街道には、宿場を拠点に江戸との交流による文化が育まれ、行き交う旅人たちが楽しんだ娯楽や芸能も含めて、いまでもその痕跡が継承されています。一方で、貧しかったゆえに近隣の村同士が協力して宿場を運営した合宿といった制度や、大きな被害をもたらした水害からの復興からは、人々の協働の歴史が見られます。甲州街道最大の難所といわれた笹子峠を超えて甲府盆地に入ると、ブドウやモモ、柿などの甲州八珍果を栽培する独特の風景や、のちに果物栽培が盛んになった土台の一つである扇状地や河岸段丘地形などの景観も目にすることができます。

交流文化をつないだ拠点、今も佇む宿場の個性を探訪する

宿場が置かれたところには、今も本陣・脇本陣などの公的機関の痕跡が残る場所が複数あります。商家は道路に面した間口の長さによって徴税されるため、奥行き深いウナギの寝床状に家が建てられ、軒を連ねていました。こうした区割りの跡は、当時の町並みと賑わいを連想させます。明治時代以降も町の中核機能を担う施設が造られ、建物だけでなく宿場ならではのまちづくりの気質が継承される姿も目に留まります。宿場は「ひと」や「もの」が行き交う拠点として、様々なエピソードや生活文化を継承してきました。一つの宿場で展開されてきた物語を聞き、学び、そして複数の宿場をたどることによって、甲州街道の全体像が見えてきます。

流通：甲州経済を支えた流通の道

上野原や大月辺りでは養蚕と織物業が盛んになり、華やかな郡内織は甲州街道を通して江戸庶民に届けられ、当時の江戸の衣服文化にも影響を及ぼしたといえます。また、周囲の山々から甲府盆地に向けて裾をなす扇状地は、斜面地であり、水はけの良い土質ゆえ蚕糸や甲州八珍果と呼ばれる農産物を生み出しました。果物の中でもブドウは甲州の名産品として知られ、人気が高かった様子は幾つもの道中記に記されています。

水：水と共に喜びと悲しみを共有する道

周囲の山々から流れる水は、川となり水運を発展させました。一方で、こうした河川は幾度となく氾濫し、人々の暮らしを苦しめました。大洪水は川の流れるを一変させ、町の形を変えたといえます。明治期の水害では、東京から比較的近かったことから全国に先駆けた治水技術によって堰堤が作られた地域もあれば、当時の川の流れて沿った跡が脇道として残り、ゆるやかな蛇行の跡を歩くことができる地域もあります。こうした水に翻弄された当時の面影が今も随所に残っています。

芸能・芸術：江戸の文化をつないだ道

江戸時代には、歌舞伎役者、浮世絵師、歌人や文人らが甲州街道を行き交いました。華やかな江戸大歌舞伎の興行は沿道の人々を刺激し、自らの手で演じたいという気運を醸成したといえます。地芝居・村芝居の流行と共に、拜殿が固定式の舞台となった神社で、村芝居が上演された地域もありました。この時代の甲斐国にゆかりのある名優は市川團十郎です。また、役者らと共に浮世絵師も多数訪れます。歌川広重が甲府道祖神祭りの幕絵を描くために訪れたときの記録から、甲斐国の江戸文化の豊かさが考察できます。甲州街道は江戸文化が花開いたところから、花開くところをつないだ道だといえるでしょう。

峠：笹子峠を支えた人々の足跡と甲斐を隔てた大自然の道

甲州街道最大の難所とよばれた笹子峠。甲州街道を分断する峠の麓には隣り合う宿場同士が協力して旅人を迎える合宿制度がありました。助け合いながら生計を立てる中でも、遊びを心がけ、難所を訪れる人々にも楽しんでほしいという気運もあったといえます。その象徴である笹子追分人形はいまも伝承されています。峠越えの道は、当時の面影を見せています。

